

活動のテーマ：商店街空き店舗を活用した日常的な子どもの遊び場づくり

活動の特徴

学生メンバーによる子どもの居場所・遊び場の創設・運営



活動対象地域 福岡県福岡市



キーワード

日常性 子ども主体の遊び 地域と子どもの
かかわり 商店街空き店舗活用 学生団体

団体のミッション

日常的な子どもの遊び場・居場所を創設し運営する。団体が子どもと地域住民との媒介役を果たし、地域コミュニティの醸成に寄与する。

助成対象活動の背景

多くの子どもが足を運び地域に密着した居場所が、マンション建設のため移転せざるを得なくなり、新たな拠点での再出発を目指す。

この団体とは・・・

箱崎地区の商店街の空き店舗で子どもの日常的な遊び場を開催・運営する学生団体

活動内容

- ・日常的な子どもの遊び場・居場所を開設（年間228日間）
- ・企画行事の実施
- ・子ども会行事への参加
- ・地域行事への参加

団体設立時期 2004年7月
 代表者 山下 智也
 連絡担当者 同上
 連絡先 住所 〒812-0053 福岡県福岡市東区箱崎2-43-13-201

電話 090-8992-9449
 F A X
 E - M a i l tomonari_sf@jcom.home.ne.jp
 ホームページ

1. 団体の設立経緯と目的

設立経緯：

空き店舗を研究室として活用した学生を中心に設立

きんしゃいきゃんばす（通称きんきゃん）は、2004年7月に誕生しました。当初は、九州大学の人間環境心理学研究室と箱崎商店連合会、まちづくり関係のNPO団体の3者間協議により、空き店舗を研究室の分室として活用し、大学をまちに開こうとするものでした。商店街に馴染もうと、きんきゃんでかき氷屋を始めたところ、子どもたちが集まり始めます。その都度子どもたちと遊んでいると、いつの間にか子どもたちがきんきゃんに居つくようになりました。秋に入り、かき氷屋ではなくなっても、子どもたちはやってきて、そこで遊び始めます。あるとき、まちの人がふらっとやってきて、「ここは何の場所？」と問いかけました。すると子どもたちは答えました。「子どもの遊び場！」それ以来、子どもたちの遊び場としてきんきゃんを続けていこうと決心し、再スタートしたのです。

きんきゃんの日々を重ねることで、次第に出来上がったコンセプトがいくつかあります。

子どもにとって日常的な場：

小学校の放課後の時間にほぼ毎日開放することを心掛けてきました。月日が重なり、子どもたちの遊び場・立ち寄り場・居場所・待ち合わせ場など、子どもにとって身近な場になっていきました。

子どもの「やってみたい」という気持ちを大切に：子どもの遊びを大人が用意するのではなく、子どもの主体性に任せることで、創造的で魅力的な遊びが生まれてきます。いつもきんきゃんが開いている「安心感」に絶妙に組み合わせる「サプライズ」は、まさにこのコンセプトがあってこそです。

“まちを遊ぶ”こと：

子どもがまちの中で遊ぶことで、子どもたちはさまざまな地域の人々と出会い、関わりが生まれます。きんきゃんが地域の人々との自然な交流の場であるようにと考えています。

改めて設立当時を振り返ってみると、当時から子どもの遊び場の減少・喪失や地域コミュニティの希薄化が叫ばれる社会状況にありました。その中で日常的な子どもの遊び場をまちのなかに開設し、子どもたちが思い思いに遊べる場が創り出されたことは、必然的であったのかもしれませんが。

2. これまでの実績

活動の認知 住民との連携 団体消滅の危機を克服

2004年度は、きんきゃんが子どもたちに知れ渡る時期でした。子どもが子どもを呼ぶかたちできんきゃんは広まり、多くの子どもが入れ代わり立ち代わり足を運んでくれたのです。次第に常連の子どもたちも現れました。また、日々をともにする商店街の方々とも、着実に関係を築いてきました。毎日顔を合わせ、挨拶を交わすことで、きんきゃんが地域に受け入れられてきたと感じています。

2005年度にも引き続き、毎日きんきゃんを開け続けます。この年に区の助成を受け、地域の子ども会育成連合会との協力関係が形成されました。それを契機に、子ども会や小学校、PTAの方々にきんきゃんの説明を行い、さらに子ども会主催の行事や地域の行事に参加する中で、次第にきんきゃんが理解され、根付いてきた時期と言えます。年度末に開催した子ども会育成連合会との共催イベント「九大探検！」の実現は、まさにその表れでした。また、きんきゃんを介して、



「きんしゃいきゃんばす」がある商店街



「きんしゃいきゃんばす」の外観

子どもたちと地域の人々との関わりが見受けられるようにもなりました。

2006年度には、「地域子ども教室」として文部科学省の助成を受けながら、毎日きんきゅんを開け続けました。しかしマンション建設の煽りを受けて、きんきゅんは移転を迫られます。一時は消滅の危機にも迫られましたが、11月になんとか新しい店舗へ引越しをすることができました。改めて新店舗を拠点とし、これまで築いてきた関係をベースにして更に活動を展開させる必要を感じさせられる時期となりました。

3. 助成年度の活動内容

1) 活動の概要（全体像）

日常とイベントを組み合わせた遊び場づくり

きんきゅんでは、小学校の放課後の時間に2時間程度、ほぼ毎日開放してきました。日常的な場であることで、子どもにとってはいつでも行ける場所であり、行けば誰かがいる場所でもあるでしょう。「また明日！」と声を掛け合えることも、きんきゅんらしさです。常連の子どもたちの数も増え、多いときには30人を超す子どもたちが立ち寄っては遊んでいくようになりました。そして日々の積み重ねの中で、子どもたちの生き生きとした表情が随所に見られたり、いつしか異年齢集団が出来上がったりと、子どもにとって豊かな遊び環境となっていたように思います。また、きんきゅんで子どもたちと日々を過ごす中で関係性が深まり、子どもにとって安心できる場にもなってきたようです。子どもの居場所としての機能も十分に果たしていたと思っています。また、子どもたちと地域の方々との関わりが毎日のように生まれるとともに、地域の方々も気軽にきんきゅんに足を運んでくださり、きんきゅんがコミュニティスペースとしての機能を果たし

ていたと言えます。

このような日常的な活動の展開に加え、きんきゅん企画のイベントはもちろんのこと、地域行事・子ども会行事への参加・サポートも行ってきました。地域への貢献とともに、地域の中にきんきゅんが認められ、これからも末永く続いていく礎となったと思っています。

2) 活動の詳細内容

<きんきゅんの日常>

今年度は、4月には16日間、5月には21日間、6月には21日間、7月には20日間、8月には18日間、9月には19日間、10月には22日間、11月には21日間、12月には19日間、1月には18日間、2月には17日間、3月には16日間と、計228日間きんきゅんを開放してきました。遊びにやってきた子どもも、一日あたり20名前後で、延べ人数で4,500名にものぼります。毎日当たり前のようにやってくる常連の子どもはもちろん、曜日ごとにやってくる子どもや時々顔を見せに来る子どももいますし、今年に入って遊びにやってくるようになった1年生も多く、中学生になってもやってくる子どももおり、かなり広い範囲にきんきゅんが根付いてきたのではないかと考えています。

子どもたちの遊びの様子

こちらが遊びのプログラムを用意するのではなく、子どもたちの「やってみたい」という気持ちをできる限り尊重し、一緒に遊んでみるというきんきゅんのコンセプト通り、子どもたち主体の遊びが、日々繰り広げられていきました。その遊びのあり方は、子どもを「遊ばせる」ではなく、子どもが自ら「遊ぶ」力を養うあり方でもあったように思います。子どもたちは子



商店街の方と一緒に遊ぶ



お隣の果物屋さんのお手伝い

どもたち同士やスタッフを巻き込み合いながら、思い思いに遊びを展開させていきました。

具体的に、きんきゅん内での遊びとしては、お絵描き、折り紙、紙粘土、けん玉、お手玉、トランプ、工作（段ボールや画用紙で）、手作りピンゴ大会、将棋、オセロ、読書、段ボールハウスづくりなどです。スタッフと話をしたり、子ども同士で会話をしているだけの子どももいます。また、きんきゅん前においてあるバンコと呼ばれる小さな縁台で遊ぶことも多く、子どもたちの遊びが道に張り出します。子どもたちが将棋を指している姿を見て、地域のおじいちゃんが話しかけてきたり、子どもたちが描いている絵を見て、おばあちゃんが微笑まげに見守っている場面も多々見られました。きんきゅん前の路上では、テーブルを出してミニ卓球をしてみたり、縄跳びをしたりしたこともありました。デジカメやビデオカメラを片手に、子どもたちが商店街を取材してまわったこともありました。また、きんきゅんを拠点として、近くの公園や広場に出掛け、そこでおにごっこをしたり、蝉取りをしたり、野球をしたりと、ダイナミックな遊びも見られました。最近では、商店街全体を使ったおにごっこをしたりもしています。もちろん、子どもたちが日々遊びを生み出しているのも、ここに列記できていないものも多数ありますし、名もない遊びの方が多いいのではないかと思います。このようにきんきゅんは、日々たくさんの遊びに包まれているのです。

遊びの魅力のひとつは、いつの間にか子どもたち同士の関係性を深めているという点です。いろいろな学年の子どもと一緒に遊び、いつしか仲良くなっているという場面を多く目にしました。1年生から6年生まで、ときに中学生も含めて、同じ場を共有できていることは、近年ではなかなか見られない状況ではないで

しょうか。それも、遊びがもつ力だと感じています。

子どもの居場所としての機能

子どもにとっては、遊び場だけではなく、居場所にもなっていたように感じられます。きんきゅんが開く前からずっと待ち構えている子どもがいることもよくあります。きんきゅんが開くことを心待ちにしてくれているのです。また、子どもたちが毎日の連絡ボードの記入やシャッターの開け閉めを手伝ってくれることもありますし、「ここが好き」という言葉を残してくれる子どもたちもいます。そんな居場所意識の芽生えも数多く見られるようになったのです。12月から「きんきゅんだより」を発行しているのですが、その文章や挿絵を子どもたちが自ら担当してくれるようにもなりました。自分たちがきんきゅんのメンバーなんだという気持ちをヒシヒシと感じ、非常に嬉しく思っています。

きんきゅんは「子どもの居場所だからおいで」と子どもたちに呼びかけているわけではありません。きんきゅんで遊び、毎日徐々に関係性ができていく過程で、ぼろっと子どもの本音が聞こえてきたり、素の姿が垣間見られたりするのです。ときに、抱えている悩みを相談してくる子どもがいます。親に怒られて学校でも怒られて、寂しくなってきんきゅんに駆け込んでくる子どももいました。そんな子どもたちと丁寧に接していきたいし、そんな子どもたちを当たり前のように受け入れられるきんきゅんであり続けたいと、スタッフ一同感じているところです。

学生スタッフの関わり

きんきゅんのスタッフは全員大学生・大学院生です。子どもたちと近い目線に立って、子どもたちと思



雨の日も子どもたちがたくさん遊びに来る



学生スタッフも子どもと一緒にプラモデルづくり

いっきりに遊びきってしまうという点が特徴です。子どもたちに「～させたい」という大人の意図にとらわれず、一見くだらないことを子どもと楽しめてしまうことが、子どもたちがたくさん集まってくる由縁なのではないかと感じているところです。ただ、もちろんまだまだ経験不足の学生ですので、そこは地域の方々がサポートしてくださるという関係性ができてきたように思います。

地域の人々との関わり

きんきゅんが対面販売の盛んな商店街にあることで、いつも地域の大人（店主・買い物客）から見守られる場にあります。子どもの遊びを眺めたり、教えたり、子どもに話しかけたり、ときに一緒に遊んでみたり。もちろん、悪いことをしたときには怒られたり。そのような関わりが毎日生まれます。具体的には商店街の旗付けを子どもが手伝ったり、お隣の果物屋さんのお客引きや掃除を手伝ったり（遊び感覚で）することもありましたし、おばあちゃんが得意の折り紙を教えてくださいださる場面もありました。子どもたちの卓球大会に、肉屋のおじちゃんが参戦したこともあります。子どもたちの声が響いていると、なんとなく足を止めて眺めてくださる地域の人々に、見守られ、支えられながらきんきゅんがあることを改めて感じさせられている今日この頃です。

<きんきゅん企画行事・地域行事>

日常の活動以外にも、きんきゅん企画の行事を行ったり、地域行事や地域の子ども会の行事にも積極的に参加してきました。

九大探検 2007 ～秋～（きんきゅん企画行事 / 9月）

9月24日には、校区の子ども会育成連合会との共



「九大探検！」での基地づくり

催、九州大学の社会連携事業の一環として、毎年恒例の「九大探検！ 2007 ～秋～」を大々的に開催しました。子ども117名、大人36名もの参加者が集まり（過去最高）、大学生スタッフ37名とともに、大学内を遊びまわりました。毎年大好評の段ボールや竹での基地づくりは大いに盛り上がりまし、今年から導入したホットボンドやラミネーターを使った工作コーナーでは子どもたちの独創的で魅力的な作品が次々と誕生していました。子ども会の方々が用意して下さった昼食を食べた後は、九州大学という場の資源を活かした構内探検や、大学生とのリレー対決、ビデオ撮影班など、子どもたちの興味に応じたオプションを実施しました。たくさんの子どもの笑顔に出会うことができ、予想以上の大成功でした。好評につき、来年度以降も引き続き開催する予定です。

講師イベント（きんきゅん企画行事 / 5月・11月・2月）

その他にも、5月には講師イベントとして春のピクニックを開催し、きんきゅんから少し足を伸ばし、講師の方とともにまちなかを探索したり、広い芝生の上で体を思い切り動かす遊びをしたりしました。11月には、同じようにまちなかを探索しながら、5月とは別の公園へとハイキング。いつもと景色の違う、広々とした遊び場のなかで、子どもたちは思いっきり遊びまわっていました。2月には、前月に子ども会の行事で作成した凧をあげるべく、講師イベントを開催しました（子ども会で凧を作成した日は、雨天で凧をあげるができなかったため）。講師に大学構内を案内していただきながら、一番広い道路での凧あげに成功しました。一味違ったかたちで大学を楽しむことができました。



講師イベント「まちなか探索」

きんきょん写真展(きんきょん企画行事/3月)

3月には、今年度分の写真(スタッフ撮影・子ども撮影含む)を1,000枚以上現像し、きんきょんで写真展を開催。その後はアルバムに収め、地域の方々に見ていただくようにもしました。また、写真を現像した際、写真屋さんにお店の前でプチ写真展を誘っていただくなど、新たな活動の展開の足がかりともなりました。

子ども会行事(餅つき大会(12月)/凧あげ大会(2月)/その他)

箱崎の子ども会育成連合会の行事にも積極的に参加しました。12月の餅つき大会では、地域の方々に餅のつき方の指導を受けながら、何日もの餅つきに精を出しました。合間での子どもたちとの触れ合いもあり、地域の中で子どもが育っているということを改めて実感しました。2月の凧あげ大会では、子どもたちの凧づくりのサポートを行いました。雨天のため、その日中の凧あげは叶いませんでしたが、後日きんきょんのイベントとして凧あげをすることができました。その他にも、7月の天瀬校区との交流会、8月の相撲大会、3月のLittle Handsとの共催のイベントにも参加し、子どもたちとともに多くの行事に参加してきました。

地域行事(人形飾り(7月)/夏祭り(8月)/箱崎校区大運動会(10月)/その他)

きんきょんでは、地域行事にも積極的に参加しました。7月の人形飾りと呼ばれる伝統行事では、箱崎商店連合会の方から行事の一環として商店街を彩るキャンドルの作成を頼まれ、子どもとみんなで楽しく作ることとなりました。また、旧きんきょんの前に住む文房具屋さんの家の箱庭の飾りつけも常連の子どもたち

と一緒にしない、やってくる子どもたちにお菓子を配る役割を率先して手伝ってくれたりもしました。8月の夏祭りでは、会場設営を手伝うとともに、子ども会のテントの横にきんきょんコーナーを設け、バルーンアートやけん玉などの遊び道具を用意し、自由に遊べる空間を創り出しました。小学生だけでなく、親と一緒に来ている乳幼児も一緒にバルーンを作ったりと、大盛況でした。10月の校区の運動会でも、会場設営・当日の運営を手伝うとともに、常連の子ども保護者の代わりに競技に参加するというようなサポートも行いました。また、当初は予定していませんでしたが、近くの筥崎宮で開催される5月の乙子様や1月の玉せせりにも、子どもたちとともに参加しました。このように、事あるごとにスタッフみんなで楽しみながら地域行事に参加することを通して、地域の方々の信頼を得ることに繋がっているのではないかと考えています。

3) 協力者・協力団体との連携の経緯とその内容

地域に根付いた活動を展開してきたことで、本地区の各種団体との連携関係が生まれてきました。箱崎商店連合会のみなさんからは、日常的な遊び場活動への理解と支援をいただいています。子どもたちが突撃で商店街のお店に取材に行った際にも対応をいただいたり、子どもたちに声をかけてくださったりと、温かく見守ってくださっています。こちらからは、商店連合会の企画であった人形飾り時のキャンドルづくりや商店街の旗の付け替えのお手伝いをしたり、きんきょんだよりを発行して商店街の方々にきんきょんのことをお伝えしたりするというかたちで関わってきました。特に会合を設けるわけではありませんでしたが、日常の会話・やりとりの中で関係が深まってきたと感



地域行事「人形飾り」 箱庭の飾りつけ



地域行事「夏祭り」

じています。箱崎校区子ども会育成連合会のみなさんから多大な協力をいただきました。特に九大探検開催時には、事前の打ち合わせ・準備はもちろんのこと、当日の進行のサポートもしていただき、年々連携が密になってきたと思っています。こちらからも、夏祭りや相撲大会、餅つき大会などのサポートにうかがいしました。日常の活動にも理解・支援をいただき、保護者や地域の自治会・各種団体のみなさんに対してきんきんの説明の場を設けてくださったことも非常にありがたかったです。

また、きんきんの運営に当たって、福岡プレーパークの会の方々にはスタッフの講習会の開催（遊び・応急処置、ロープワーク等）や、遊具・材料の調達の面で多大な支援をいただきました。同じく学生団体で子どもと関わる活動をしている Little Hands とは、互いのイベント時に協力し合う関係となりました。

さらに、日常の活動に関しては九州大学大学院の南博文教授に相談に乗っていただくとともに、九大探検時には九州大学総務課の方々のご支援をいただきました。このように、たくさんの方々の協力の上できんきんは日々を楽しく過ごすことができたと思っています。

4) 活動推進にまつわるエピソード

きんきんでは、やはり毎日開け続けることが一番の苦労だと言えます。しかし、きんきんがスタッフにとっても日常の場となり、居場所となっていくことで、お互い協力し合いながら、乗り越えることができたと感じています。

また、子どもたちが毎日きんきんに遊びに来て、生き活きとした表情を見せてくれることが何よりの自慢です。子どもが遊びに来なかった日は一日もありません。



近くの広場でみんなでゴムとび

せん。そればかりか、中学生になっても遊びに来てくれたり、幼稚園の子どもも遊びに来てくれたりと、きんきんに遊びに来る子どもの幅も広がりました。そして、多くの子どもたちが「将来きんきんを引き継ぐから！」と後継者宣言をしてくれていることも、非常に自慢できる点です。

4．活動の成果と課題

1) 目的・目標の達成度 自己採点

当初の目的通り、きんきんを日常的に開放し続けることができました。子どもたちにとっても充実した時間・空間（居場所）であり、多くの仲間と出会い、遊ぶ場になっていたと思います。きんきん付近の商店の方々とも関係性が深まり、移転後の活動の展開に対する懸念も解消されました。また、きんきんの子どもたちが生み出す賑わいが、商店街ひいては地域の活性化の一助を担うことができたのではないかと考えています。また、きんきんに立ち寄る地域の方々も増えました。多種多様な人々が行き交うきんきんにおいて、スタッフが媒介となることで、コミュニティスペースとしての役割を果たしていたと考えています。

2) 地域内外への波及効果

きんきんの活動に興味関心を持ってくださった地域内外の方から、きんきんの事例報告を依頼される機会が増えました。福岡市の子どもに関わる NPO からシンポジウム依頼をはじめとして、宇美町の子ども会育成連合会、また佐賀県の NPO から事例報告を依頼されるなど、きんきんのあり方が注目されている様子がひしひしと感じられました。その期待に応え続けられるよう、日々の活動をがんばっていこうと改め



近所に住む方から折り紙を教えてもらう

て身を引き締める思いです。

3) 活動の継続性

上述してきたように、商店街や地域の各種団体と信頼関係が構築され、スムーズに日々の活動が行われるようになりました。また今年度末には小学校の先生方とお話する機会があり、協力体制ができつつあります。このような周囲の理解・協力も、これからの活動を継続していく中で非常に重要だと感じています。スタッフ体制に関しては、少数ではあるものの、きんきゃんをスタッフ自身も居場所とするような熱心なスタッフが集まり、あと数年は引き続ききんきゃんを運営し続けることができる状況にはあります。しかし、長期的にきんきゃんを展開させていくためには、入れ替わりのある学生スタッフで運営しているからこそ、工夫が必要になってくると考えます。地域の協力も仰ぎながら、安定したきんきゃん運営ができるような基盤をこれから築いていきたいと思っています。

4) 活動着手後に見えてきた地域が抱える課題と解決方策

今年度はきんきゃんの活動を安定して継続させることに尽力してきましたが、周囲に目をやると、商店街はマンション建設の煽りを受け（10階建て近いマンションが2つも建設中）、商店街自体の活気が落ち込んできています。また、昔ながらのまちだからこそ結束の強かったコミュニティも変容過程にあり、僅かながらの危機感を覚えています。コミュニティが揺らぎ始めてしまった際に、きんきゃんがコミュニティの要の一つとして機能できるように、新しく移り住んでくるであろう子どもたちも含めて、きんきゃんの子もたちとともに努力していきたいと思っています。



「九大探検！」独創的な作品が誕生した工作コーナー

5. 今後の展開

学生団体として長く続けていくために、地域との協働の中で循環して活動を展開していくことのできる組織体制を構築していくことが重要だと考えています。今年度の活動が土台となり、可能性が開けてきていると感じているところです。資金調達も本団体の課題のひとつではありますが、活動の実績が認められてきており、事例報告依頼や遊び場活動サポート依頼も増えてきているので、それらの依頼を受けることで、安定した財政基盤を形成していきたいと考えています。活動の目的自体はこれまで同様、あくまで子ども主体の遊び場を毎日続けていくことに変わりはありません。嬉しいことに、きんきゃんの常連の子どもたちの何人かが、将来後継者としてきんきゃんを運営したいと言ってくれています。きんきゃんの卒業生がスタッフとして活動し、地域における子どもたちの拠点として（コミュニティスペースとしても）存続していくためにも、きんきゃんの「また明日」を毎日繋げていくことが一番重要な道筋だと考えています。



マンションの建設が続く商店街



学生スタッフも子どもとカルタで盛り上がり！